

# 第100回 「京都」に導いたベンチャーズ

去る10月上旬、ベンチャーズの3代目リードギタリスト、ジェリー・マギーが単独公演のため来日していましたが、ツアーのリハーサル中に心臓発作を起こし、残念ながら、4日後の12日に都内の病院で亡くなりました。

ジェリーは、アメリカでは実力派のスタジオ・ミュージシャンとして知られ、モンキーズの初期アルバム『恋の終列車』『アーム・ア・ピリバー』などでギターを弾いています。が、エレキの神様といわれたギタリスト、ノーキー・エドワーズがベンチャーズを最初に脱退した後釜として昭和43年に加入します。

作曲能力も高く、渚ゆう子が昭和45年12月にリリースしてヒットさせた京都シリーズ第2弾『京都慕情』や翌年、欧陽菲菲がヒットさせた『雨の御堂筋』創作にあたっては、中心的な役割を果たした人物でした。

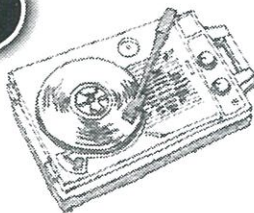
京都シリーズ第1弾『京都の恋』は、ベンチャーズのドラムス担当メル・テイラーが中心になって作られた。

たようですが、『京都慕情』『京都の恋』ともに、昭和45年2月に発売されたベンチャーズの日本制作アルバム

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵・松本 浦



ム『ゴールデン・ポップス』に収録されていた彼らのオリジナル・インスト作品が原曲でした。

この年3月から大阪で万国博覧会が開催されています。親日本のベンチャーズはこの国際的なイベントを意識して『EXPO70』と名づけた曲を米国で作ります。これが「キョウト・ドール」と日本向けに改題され、さらにメル・テイラーの指名で渚ゆう子が3か月後の同年5月に『京都の恋』としてカバー（作詞・林春生、オリコン8週連続1位という偉業を達成する大ヒットになりました。雑踏の万博会場より静寂な古都のほうが恋する女性には似つかわしいということなのでしょう。

前出のベンチャーズのアルバムに収録されていた『京都慕情』の原題は「REFLECTIONS IN A PALACE LAKE」というもので、当初は「パレスの夜」という題名がつけられていました。超訳すれば「水面に映る皇居、あるいは古刹の想い出」といった意味合いでしょうか。『EXPO70』が『京都の恋』へと変更された一因として、こ

の『京都慕情』の原題「パレスの夜」が、平等院、金閣寺、銀閣寺などを彷彿させたことにあるのではないかと私は推測します。

紅葉の時期になると「そうだ京都、行こう。」のテレビCMをよく見ますが、こうした観光PRのルートともいえる「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンが始まったのが、万博終了後の昭和45年10月からのことでした。京都への旅は、ベンチャーズがレールを敷き、そこに旧国鉄が同乗させてもらった感もありますね。「京都二部作」は、渚ゆう子の代表曲となりましたが、「渚と夕景」が思い浮かぶ芸名からのばれるように、彼女はハワイアン出身でした。デビュー前にマヒナスターズの前座歌手を務めていたことから、レコードデビュー曲の『早くキスして』では、マヒナの裏声担当・佐々木敦一と気持ち良さそうにデュエットしています。ハワイアン歌手だった渚を

「京都」へと導いたベンチャーズですが、彼らは『ダイアモンド・ヘッド』の存在だけでなく、古都の魅力も再認識させてくれました。

